

古典資料の継承意識の涵養手法に関する教育的実践研究

松原哲子 (国文学研究資料館 / matsubra.noriko@nijl.ac.jp) ・ 竹内綾乃 (国文学研究資料館)

本研究プロジェクトの目的

次世代の人材の獲得への試み

—— 古典継承のバトンを渡す ——

古典籍のマテリアル分析の研究の発展や、試料である古典籍の望ましい継承には、研究者に関心を寄せてもらい、活用を促していくのはもちろん、次世代の社会の担い手に、継承意識を育てていくことが大切である。それは、日本文学・古典文学の研究者を輩出することだけを意味するのではない。古典や古典籍に一定の関心を持ち、その継承について理解のある、あるいは順当な判断のできる社会人への成長につながっていく体験の場を提供していくことが大切である。

それがもっとも望めるのが、様々な分野についての基礎的な学習する中学校あるいは高等学校における教育期間である。本プロジェクトでは中学校・高等学校の教諭の方々と連携し、文理融合や協働の取り組みの意義を、生徒が体感することのできるイベントを開催することとした。国語や古典に興味を持っている生徒はもちろんのこと、顕微鏡での観察に興味がある、紙漉き体験に興味があるなど様々な動機でワークショップに参加してもらい、ホンモノの古典籍を実際に手に取ることで、古典継承のバトンを受け取ったという実感を持ってもらうことを目指している。

実践例 1

家庭科教育とのコラボレーション

東京都 実践女子学園中学校・高等学校との共催

江戸の循環型社会を和本の紙質から感じ取る 古今のリサイクルペーパーの品質を比較する

近年、中等教育では様々な教科に関係させて、SDGsに関する情報を生徒に提供し、グループワーク等に繋げている。

実践女子学園における家庭科教育では、牛乳パックパルプが未使用の紙材で出来ていること、そのまま廃棄するのは木をゴミ箱に捨てる行為に等しいので、自治体のルールに従って処理することが大切だと、調理実習の時など機会のあるたびに取り上げている。

そこで、本プロジェクトでは、漉き返し紙の観察を通して、江戸の町の循環型社会のあり方を知り、現代におけるSDGsに関する取り組みについて考えさせる場を提供した。また、草双紙（江戸の町で展開した、漉き返し紙に印刷し、販売された古典籍）を例に、分析機器を利用した研究方法が、古典の研究に活用されていることについて紹介し、文理融合を体感してもらう機会とした（2024年1月開催）。

※本イベントについては実践女子大学芸文資料研究所を加えた三者共催で開催した。



江戸時代の本に触れる
観察する本を選ぶ



紙質を観察する



紙を漉く



紙質分析に挑戦する



自作の紙を観察する

背景

漉き返し紙の再現実験の試み

古典籍に用いられた料紙の中には「漉き返し紙」と呼ばれる紙がある。一度使用した紙を材料として漉かれた紙を指す。資料の年代・性質・様式等によって、紙質の実態は異なる。

古典籍に使用された漉き返し紙のマテリアル分析の成果は少なからず示されているが、その対象は文化財や貴重書に分類される類が中心である。近世期の、特に江戸の地で大衆向けに刊行された出板物は、それらとは大きく性質が異なるものであるため、新たな評価法・整理法の開拓の必要を感じるに至った。その試みとして、虫損等で本としての機能を失った近世期の板本を材料とした、漉き返し紙の再現実験を行った（この取り組みについては、現在継続中）。本研究プロジェクトは、その実験の過程で得た資材やノウハウを基とした取り組みである。

実践例 2

部活動・課外活動とのコラボレーション

静岡県 静岡聖光学院中学校・高等学校との共催

茶殻入りの紙作りから考える地域創生 国際交流のツールとしての紙漉き

静岡聖光学院においては、美術室を会場に、美術部所属の生徒にイベント準備に協力してもらい、イベントを開催した。

聖光学院では、教育活動の一環として、地元の産物である茶を栽培し、製茶し、飲むという「お茶部」の取り組みがある。事前の打ち合わせで、飲み終わった後の茶殻を漉き込んだ紙の製作について提案があった。そこで、本イベントについては、文理融合研究等の紹介に加えて地域創生に対する意識づけを図るものとして位置付けることとなった。

加えて、イベント開催日に聖光学院が教育パートナーシップの維持・発展を目的とする「Experience Shizuoka Tour 2024」で滞在中であった、タイ・マレーシア・イタリアの生徒も加わり、互いにコツを教え合ったり、自分の作品を見せ合ったりなど、国際色豊かな交流の場となった（2024年7月開催）。



交流生にコツを教える



茶殻を漉き込んだ紙